

伝統は常に変化と共にあり

母校は今年9月1日、明治6（1873）年の創立から150周年を祝う記念式典を、あきた芸術劇場ミルハス（秋田市）で行った。季節外れな33度を超える暑さの中、来賓、教職員、同窓会員、生徒ら約1400人が出席し、県内で最も長い歴史を持つ高校の150周年の節目を祝った。

昨年暮れ、校内外に呼びかけて募集し、全校生徒の投票と選考委員会、職員会議を経て決定された150周年のキャッチフレーズは、この春卒業した高橋獅希斗さん（秋田市）の「秋高150（伝統は常に変化と共にあり）」。「日本が、コロナ禍や異常気象に加え、国際環境の不透明な先行きへの対処を迫られている時代にふさわしい言葉が選ばれた。

柘植敏朗校長は、「150年にわたる長い伝統を土台として、時代を切り開いていかななくてはならない。千変万化する社会に適応しながら、新たな歴史と伝統を作っていくことが、次を生きる者たちの責務だ」と式辞を述べた。また、人口減少する秋田では、拡大一辺倒だった考え方を整理し、秋田に残る資源の活用や、まだ認知されていない秋田の価値を掘り起こすことも求め

られると述べた。

銭谷眞美同窓会長は、同窓会の記念事業として寄付を募り5000万円の目標を達成したことに謝辞を表明した。猿田和三秋田県副知事は来賓として、在校生に向け、秋田高校が創立200周年を迎えるためには世界の平和、日本、そしてふるさと秋田の繁栄があつてこそだとして、高い志を持つて新時代の開拓者として、社会の進歩、発展に貢献されることを期待したいと述べた。

生徒会長の近藤暁乃さん（2年）は、祝辞に対し、「秋高の伝統は、先輩方

から受け取ったものを、時代に応じて変化させ、つなぎ続けてきたからこそ価値がある。私たちも、伝統をより良い形で後輩に託していく」と述べた。

この後、歴代校長や永年勤続者、150周年記念のキャッチフレーズやロゴマークの考案者など、延べ97人に表彰状を贈呈した。

続いて、読売新聞特別編集委員の橋本五郎さんのコーディネートで、日本製鉄会長の進藤孝生さん、五城目町で移住や起業支援などに携わる丑田香澄さん、お笑いトリオ「ハナコ」の岡部大さんの4人でシンポジウムが行われ



天上天下 TENJO TENGE

「汝、何のためにそこにありや」秋高にとつて、これほど古くて新しい合言葉は校訓以外にないだろう。校長が生徒に語った言葉として、これほどまでに多くの卒業生に語り継がれ、半世紀を過ぎてもお、事あるたびに引き合いにされるフレーズは、全国のどの高校を探してもなかなか見つからないにちがいない▼創立150周年記念式典とシンポジウムでは、何人もの登壇者から幾度となく発せられた。都内の会合に行く、各界で活躍される方々が口にするのを聞く。秋田市内の会社経営者が懇談中、座右の銘として説くこともあつた。「汝、何のためにそこにありや」と語る表情は、誰しも実生き生きとして躍動感に満ちていた。いつも心にとどめて自らの掛け、奮い立たせてきたのだから▼「校長が全校集会で語った挨拶を録音したCDを持っているから、貸してあげようか」と言われ、聞いてみた。校長の声は少し甲高く、やや早口であつたが、こみ上げるような情熱と勢いがじわりと伝わってきた▼第28代校長（昭和38（42年）の鈴木健次郎氏（大正13年卒）。社会教育の先駆者であつた。令和5年の今も、時空を超えて心に響くゆえんを考え、学ばずにはいられない。